

Giving, Belonging, and Writing : On the Relationship between Immigrants and America in All I Could Never Be

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-01-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 本田, 安都子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/8676

贈与と帰属と創作活動

— *All I Could Never Be* に見られる「移民」と「アメリカ」の関係について—

Giving, Belonging, and Writing

-On the Relationship between Immigrants and America in *All I Could Never Be*-

本 田 安都子*

(2014年9月30日 受付)

1. はじめに

Anzia Yeziarska (1880?-1970) は、1920年代アメリカで活躍したロシア出身のユダヤ系移民作家である。彼女の出世作である短編集 *Hungry Hearts* (1920) は、1922年に映画化されるまでの人気を博した。“Sweatshop Cinderella”という、当時の彼女につけられた異名が示すように、イージアスカは、労働者としてアメリカ社会の底辺に生きる東欧系ユダヤ移民の生活を活写することによって名声を得ており、まさに“rags to riches”という言葉を体現する存在として当時はもてはやされていた。¹ しかしながら、社会の底辺で苦しむ移民の現実を告発するというイージアスカの作風は、第一次大戦後の好景気に沸く1920年代前半には人気を博していたものの、1920年代末にアメリカ社会が大不況へと転じる頃には、徐々にその人気にも陰りが見え始め、1930年代以降は小説 *All I Could Never Be* (1932) を出版した後、1950年に自伝的小説 *Red Ribbon on a White Horse* を出版するまで長い沈黙の期間が続く。

イージアスカの一人娘 Louise Levitas Henriksen は、彼女の母が日常会話やインタビューなどで自身のことを語る際、その時の気分に応じて事実を改変したり、話をでっち上げたりする癖があったと述べている(1-2)。それはまさにイージアスカの作風にも反映されており、彼女の作品の大半では、自身をモデルにしたと思しきユダヤ移民女性の人生が繰り返し語られる。² その中でもイージアスカが特に固執したテーマが、彼女と John Dewey (1859-1952) との間で短命の内に終わってしまった恋愛関係である。二人の出会いは1917年12月に遡る。1911年に弁護士の Arnold

*福井大学教育地域科学部言語教育講座

Levitas と結婚した後、翌年誕生したルイズの養育と自身の長年の夢である執筆活動をめぐり、イージアスカは夫とたびたび対立していた。ついには1915年から別居することとなり、慈善団体の職員やハウスマイドの仕事を転々とする。1917年、家政学の教職免状を持っていたイージアスカは、ニューヨーク市の公立学校で教職に就こうとするが、以前に勤めていた学校での勤務態度を理由に申請却下の憂き目にあう。この決定に抗議するため、当時、コロンビア大学教授として広く名を知られていたデューイのもとを訪ねる。イージアスカは、1901年から1904年までコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジに在学していたものの、この高名の教育学者とは全く面識がなかった。しかしながら、偶然新聞で見たデューイの記事に触発され、彼に会いに行く決心をする。学校運営陣と信条の自由を巡って対立する公立学校教員の権利保護を訴えるデューイの記事を目にし、彼であれば自分を苦境から救ってくれるに違いないとイージアスカは考えたのだ。かくして、デューイとの対面を果たしたこのユダヤ移民女性は、アメリカの教育制度や雇用制度への不満を初対面の学者に打ち明ける。それに対し、ニューイングランド出身の思想家は、自身の境遇とは全く異なる場所からやって来たこの女性に大いなる関心を示す。デューイは彼女にこれまでの体験を文章にして発表するよう勧め、様々な形で彼女に援助の手を差し伸べるようになる。翌年の1月には、自身の大学院セミナーへの聴講を許可し、同年夏には、フィラデルフィアでの社会学調査にポーランド語の通訳として参加できるよう取り計らい、さらには、イージアスカの作品が主要誌で発表されるよう知り合いの編集者に掛け合うまでした。しかしながら、両者の蜜月は長くは続かず、フィラデルフィアでの調査が終わる頃にはその関係は自然消滅の一途を辿り、秋にデューイが講演のため外遊をした後、彼等の交流は途絶えてしまう。³

先に述べたように、イージアスカは自身の伝記的事実を改変して小説を創作するのが常であり、同じ物語を強迫観念的に何度も語り直している。日常会話においても「創作的」であった彼女の性質ゆえ、その伝記的「事実」を辿ることは難しい。これまでに出版されたイージアスカに関する二冊の伝記——実子ルイズによる *Anzia Yeziarska: A Writer's Life* (1988) および、Mary V. Dearbornによる *Love in the Promised Land* (1988) ——はともに、書簡や公文書記録などに依拠しつつも、大半はイージアスカ自身の体験を下敷きにして創作されたと思しき諸作品における描写を手掛かりにして彼女の伝記を構成している。イージアスカの側からは創作の形で何度も繰り返し語られてきたデューイとの関係は、彼の方から公式に語られることはなく、1977年、長い間非公開とされてきたこの教育学者の詩作品——そのいくつかは、イージアスカに向けて書かれたものであり、デューイの許可なくイージアスカの作品に採録されていた——が書籍化されることを契機に、両者の側からその関係が確認されることとなった。

デューイとの関係がイージアスカにとって重要であり、それが長年にわたる彼女の創作の源泉となった背後には、ただ単に、彼らが短期間であっても恋愛関係にあったという事実以上のものがあつたと考えられる。イージアスカは、アメリカ社会の様々なシステム——例えばそれは、教育制度や行政機関に代表して示される——からはじき出され、アメリカ経済を下支えする「労働

力」としてしか必要とされない移民が、その不満を発露し、さらには理解を求めて苦闘する姿を頻繁に描く。一例を挙げれば、デューイの勧めを受けて、公立学校での教職申請を却下された際の経験をもとに書いた“Soap and Water”は、身なりの汚さゆえに教職に就けない若い移民女性の物語である。教職免状取得に向けて、洗濯工場で働きながら学校に通っていたため、自身の身なりに気を遣う余裕さえない主人公に対し、学部主任は “[s]oap and water are cheap. Anyone can be clean” (71) と事もなげに言い放ち、身なりの汚さを彼女個人の落ち度として、推薦状を書くことを拒否する。ここには、アメリカ人の身なりを綺麗にすることと引き換えに、汗水を流して学費を捻出してきた彼女の長年の努力が、権威側の不理解により一瞬にして無にされてしまうという皮肉がある。教職の道を断たれた失意の主人公は、10代の頃に読んだユダヤ移民詩人 Morris Rosenfeld よる詩を思い出す。その時の心情を以下のように綴る。

Like a spark thrown among oil rags, it set my whole being aflame with longing for self-expression. But I was dumb. I had nothing but blind, aching feeling. For days I went about with agonies of feeling, yet utterly at sea how to fathom and voice those feelings — birth-throes of infinite worlds, and yet dumb. (73)

「自己表現 (“self-expression”）」を学ぶため、主人公は大学に入学する決意をする。ここに興味深い捻りがある。つまり、ローゼンフェルドはユダヤ人読者に向けて、イディッシュ語で詩を書いていた。ゆえに、主人公が読んだ彼の詩もイディッシュ語で書かれたものと推察される。しかしながら彼女が目指したのは、英語で表現活動をすることであり、そのための大学進学なのであった。結果的には、大学に入っても、英語で詩作をすることも教職免状を得ることも叶わなかったのだが、物語の最終的な救済は、大学卒業から10年後に偶然再会した化学教師 Miss Van Ness に、これまでの鬱屈した気持ちを吐露した時に訪れる。教職に就けなかった主人公は、卒業後も工場で働き続け、社会的上昇の叶わぬ現実には、“America! Ach, America! Where is America?” (76) と悲痛な叫びをあげる。この苦しみの出口として彼女は、“It seemed to me if I could find some human being to whom I could unburden my heart, I would have new strength to begin again my insatiable search for America” (76) というように、アメリカ人の「理解者」の出現を待ち望む。再会した二人の間でどのようなやり取りが交わされたかは一切語られないのだが、主人公は、自分の話に耳を傾けてくれるミス・ヴァン・ネスの姿に感激し、“I felt that even if I had not said a word she would have understood all I had to say as if I had spoken” (76-77) というように、彼女の「理解者」としての力量を褒め称える。そして、アメリカ人の「理解者」との遭遇がミス・ヴァン・ネスとの再会で叶えられ満足する主人公の、“I went out from Miss Van Ness’s office, singing a song of new life: ‘America! I found America’” (77) という言葉とともに、物語は締めくくられる。ここには、イージアスカの作品に何度も出てくるテーマ——「約束の地」での不条

理や苦境と対峙する移民が、理解のあるアメリカ人に会う——だけではなく、移民作家としてのイーリアスカの反映——アメリカ人読者に向けて、移民の現実を伝える——が見て取れる。この短編作品がデューイの勧めによって書かれ、彼のサポートを受けて出版されたという経緯を鑑みれば、イーリアスカにとってのデューイとは、上記のような移民とアメリカ人との関係性を象徴する人物であったと言えよう。その意味において、デューイ、および彼との関係は、イーリアスカの創作活動の源泉として、彼女の作品に幾度も登場する重要なモチーフであることが理解される。

本稿では、デューイとの出会いから別れまでを下敷きにして描かれた小説 *All I Could Never Be* を採り上げ、デューイ的登場人物と主人公の移民女性との間の「相互理解」の関係性がどのように描かれているのかを考察する。1932年に発表されたこの小説以前にも、デューイを模した人物が登場する作品は複数ある。⁴ しかしながら、明らかに現実の二人の関係を反映した筋書の作品は、この小説が初めてである。先に述べたように、デューイとの関係が単なる個人的な男女の関係であるだけではなく、作家イーリアスカにとって、「移民の声」の受け手である「デューイ」は、個人を超えて「アメリカ」そのものを象徴するような存在であったのだと言えよう。そうであれば、デューイの援助によってキャリアを開始してすぐの1920年初頭に「移民作家」として人気を博したイーリアスカが、10年も経たない内に人気に陰りの出た1930年代に発表したこの小説において、「デューイ」との関係性をどのように描いているのかを分析することは、作家イーリアスカとアメリカ社会との関係性を考察する上で重要と考えられる。以下において、まず、イーリアスカの作品にみられるもう一つの重要なモチーフである「贈与」の表象の重要性について概観する。その後、デューイ的人物の登場する初期作品などとの比較も交えながら、「贈与」を切り口に、*All I Could Never Be* における「デューイ」と「イーリアスカ」との関係について考察する。

2. ユダヤ文化と贈与経済

イーリアスカは、1900年代初頭に実際に入居していたボーディングハウス Clara de Hirsch Home⁵での体験をもとにして描いた小説 *Arrogant Beggar* (1927) の題辞にエマーソンによる随筆“Gifts”からの引用を用いている。

We do not quite forgive a giver. The hand that feeds us is in some danger of being bitten. We can receive anything from love, for that is a way of receiving it from ourselves; but not from any one who assumes to bestow. . . . We ask the whole. Nothing less will content us. (*Arrogant Beggar* 5)

アメリカのドイツ系ユダヤ人による東欧系ユダヤ移民への慈善活動⁶を批判したこの作品に対し、

その題名が示す通りの「傲慢な物乞い」の姿に不快感しか見出さなかった批評が発表当時は散見された (Stubbs vii)。ルイズ・ヘンリクセンは、贈与者から「すべて」を与えられることを要求するイージアスカの態度の背景として、彼女が生まれ育った東欧のユダヤ文化の影響を指摘する。

This undemanding generosity was the behavior Anzia hoped for or expected from others. She had always acted on the assumption that members of her family, no matter how distantly related, owed her help — not charity — when she needed it, because she was a struggling artist. From her view point, the Jewish tradition in which she had been raised — that those who are well off are duty-bound to share with those who aren't — imposed this obligation not only on members of the same family, but even on those of the same East European village, the same ethnic background, in fact on all Jews. (227)

これは、「ツェダカー (*zedakah*)」と呼ばれるユダヤ文化にみられる贈与習慣に言及しているものと考えられる。「ツェダカー」とは、元来は「正義」を意味するヘブライ語であり、後に広く「慈善」や「施し」を意味するようになった (Mauss 18)。ユダヤ教において、「慈善」あるいは「贈与」は宗教的善行とみなされており、Jacob Neusner は、“*zedakah* is the highest expression of the holy way of living taught by Torah, [. . .]. *Zedakah* defines a way of being Jewish for many Jews” (2) と述べ、その宗教的意味の大きさとユダヤ性との関連を強調する。なぜ贈与することが宗教性を帯びた行為とみなされるかという点、ユダヤ教には、“all men’s possessions belong to God and [. . .] poverty and riches are in His hand” という考え方があるからだと Raphael Posner は述べている (569)。そのような考え方に照らして考えれば、上記のルイズ・ヘンリクセンによって語られたイージアスカの態度は、決して個人的な「傲慢さ」ではなく、ユダヤ文化の伝統に根差した思考方式に依拠したものだと思われる。「ツェダカー」は、「シュテットル (*shtetl*)」と呼ばれる東欧のユダヤ人共同体における「富」——物質的なものから、知識など非物質的なものまで及ぶ——を循環させることによって共同体を機能させる上で欠かせない伝統習慣であった。

子供時代を「シュテットル」で過ごしたイージアスカにとって、「ツェダカー」の思考方式は、人間関係を理解する上で重要な参照点であり、彼女の作品には「ツェダカー」あるいは「贈与」への言及を示唆する描写が多数存在する。⁷中でも、デューイとの関係を分析する上で重要と思われるのが、「帰属」についての議論を巡って現れる「贈与」のモチーフである。その例として、イージアスカの短編作品“Children of Loneliness” (1923) を採り上げる。大卒の教員として自立した生活を送るユダヤ系の主人公 Rachel は、「旧世界的な」マナーや生活習慣に固執し続ける父母に嫌悪感を抱く一方、そのような自身の態度に罪悪感を抱いてもいる。この矛盾した心情を解消すべく彼女は、“It was my own brains, my own courage, my own iron will that forced my way

out of the sweatshop to my present position in the public schools. I owe them nothing, nothing, nothing” (183) と両親への反発を正当化する。ここで興味深いのは、レイチェルが、自身の悩みを「負債」の言語 (“I owe them nothing, nothing, nothing”) を使って表現している点である。つまり、血の繋がりに故に自身の存在を両親に負っている——両親から自分の生を「贈与」されている——という考えを否定し、アメリカ的な「セルフメイド・マン」の思想に倣い、今の地位や生活は全て自身の手によるものであり、両親に負う所など何もないと彼女は自己を正当化しようとするのだ。しかしながら、そのすぐ後には “I only want to get to the mountain-tops and view the world from the heights, and then I'll give them everything I've achieved” (186) というように、両親の「贈与」に報いたいと切実に思う。物語は、両親とその「贈与」を巡る二つの相反した主人公の心情が解消されることなく終わる。両親に報い、「贈与」の環が完成されることによって、ユダヤ共同体への帰属を確かなものとするか、その環を断ち切って、「アメリカ人」としての新たな自己を独力で作り上げていく道を探るか、というような「贈与」と「帰属」を巡るユダヤ移民の葛藤は、イージアスカが好んで描く主題と言える。

3. 贈与と創造性

「贈与」というモチーフは、イージアスカとアメリカの関係を語る上でも重要な役割を果たしている。1923年に発表された随筆 “Mostly about Myself” において、アメリカははまだ建設途上の国であり、誰もがその事業に参加すべきなのだとイージアスカは語る。その際に見逃せないのは、彼女が「与える (give)」という言葉を繰り返し使っている点である。

I saw that America was a new world in the making, that anyone who has something real in him can find a way to contribute himself in this new world. [. . .] I had to *give* to America my aching ignorance, my burning desire for knowledge. I had to *give* to America the dirt and the ugliness of my black life of poverty and my all-consuming passion for beauty. (142; emphasis mine)

さらに続く箇所では、1920年発表の短編集 *Hungry Hearts* の成功によってもたらされた「移民作家イージアスカ」としての成功について「贈与」の言語を用いて語っている。

As long as I kept stretching out my hands begging, begging for others to understand me, for friendship, for help — as long as I kept begging them to give me something — so long I was shut out from America. But the moment I understood America well enough to tell her about herself as I saw her—the moment I began to express myself—*America accepted my*

self-expression as a gift from me, and from everywhere hands reached out to help me. (142; emphasis mine)

なぜイージアスカは、「アメリカ」にその一員として受け入れられるためには、アメリカから何かを「乞う」ことをやめて、反対に、アメリカに「与える」ことが必要だと説くのだろうか。そのような考えはこの随筆のみならず、1920年『ネイション』紙上に発表された詩“The Deported”でも繰り返されていることが確認できる。この詩は、アメリカから祖国へ送還される船上の移民の視点から語られ、移民とアメリカの関係を再考する内容となっており、その一節で、「乞う」ことから「与える」ことへの転換が、反省の念を込めて移民の口から叫ばれる。

In my adolescent blindness, I thought that America was a quick leap into Utopia.

I thought that America was a ripe fruit that I could pluck from the visionary garden of liberty.

Instead of nurturing this garden that would some day bring forth the fruit I longed for, instead of propping up the boughs of the young trees, clearing out the weeds, I lopped off the branches, tore at the roots, trampled on tender buds. (102)

この詩に見られるような、「楽園」としての「アメリカ」は、イージアスカの同時代人のユダヤ移民の多くによって共有された考えであり、「乳と蜜」の溢れる土地という聖書のイメージは、迫害や貧困から自分たちを解放してくれる「約束の地」アメリカを語る際に、ユダヤ移民たちによって使われた常套句でもあった(Heinze 39-41)。しかしながら、イージアスカはそのような移民の紋切型を否定し、「楽園」で無限に果実が実りつづけることなどなく、自分たちは「楽園」に「滋養を与える」仕事こそをしなければならないのだと主張する。なぜそこまで「贈与者」となることに彼女はこだわるのだろうか。

そこには、アメリカの資本主義経済を動かすための単なる「労働力 (hand)」としての移民の現実を書き換えようというイージアスカの意図があると言える。「乳と蜜」に溢れた「約束の地」に希望を抱いてやって来たユダヤ移民が、ゲットーの工場で明けることのない重労働の日々に絶望するという筋書きは、イージアスカの作品では紋切型と言えるほどに繰り返し描かれている。例えば、“How I Found America” (1920) という短編作品では、東欧からやって来たユダヤ移民の少女が、“I didn’t come to America to turn into a machine. [. . .] Does America want only my *hands* — only the strength of my body — not my heart — not my feelings — my thought?” (115; emphasis mine) と嘆く。先に引用した“Mostly about Myself”において、イージアスカは移民による「アメリカ」建設への貢献を主張していたが、移民ができる貢献とは、「労働力」による貢献ではないか、という意見もありうるだろう。しかしながら、資本主義という交換経済の中でそれ

が行われる限り、移民の「労働力」は「贈与」となりえないと彼女は同随筆の中で訴える。

I had dreamed of free schools, free colleges, where I could learn to give out my innermost thoughts and feelings to the world. But no sooner did I come off the ship than hunger drove me to the sweatshop, to become a “hand”—not a brain—not a soul—not a spirit—but just a “hand”—cramped, deadened into a part pf a machine—a *hand fit only to grasp, not to give*. (141; emphasis mine)

イージアスカがアメリカに与えようとするのが、「労働力」ではなく「創造性」——移民の現実を小説として描くこと——でなくてはならないという点も、アメリカとイージアスカの関係を「贈与」の視点から見る上で重要である。別の随筆“America and I”（1923）では、「贈与」と「創造性」の関係性が言及される。

I arrived in America. My young, strong body, my heart and soul pregnant with the un-lived lives of generations clamoring for expression.

What my mother and father and their mother and father never had a chance to give out in Russia, I would give out in America. [...]

[...] I'd be *a creator, a giver*, a human being! My work would be the living joy of fullest self-expression. (144-45; emphasis mine)

この引用では、先に述べた「乳と蜜」の「楽園」での充足の日々を夢見る移民の姿に代わって、世代さえも超えて、内なる感情を長きに亘って胸に蓄積し、その発露の場を求め焦られるという移民の姿が示唆されている。冒頭の「声を上げることを求めるも、叶えられずに終わった幾世代にも亘る人生を宿す、私の若く、力の漲る肉体、私の心と魂（“My young, strong body, my heart and soul pregnant with the un-lived lives of generations clamoring for expression”）」という一節は、資本主義社会の歯車の一部として、その肉体を酷使されるだけの移民というイメージによって代わる、自己表現の源泉をその体に宿す「創造者」としての移民というイメージを髣髴とさせる。

では、移民がアメリカに贈与するものは、なぜ「創造性」でなければならないのだろうか。ここで、Lewis Hydeによる贈与論を援用してこの問題を考えてみたい。ハイドは、「創造性」とはそもそも芸術家に与えられた「贈与」なのだという考えを提示する。

An essential portion of any artist's labor is not creation so much as invocation. Part of the work cannot be made, it must be received; and we cannot have this gift except, perhaps, by

supplication, by courting, by creating within ourselves that “begging bowl” to which the gift is drawn. (186)

ハイドはここで、創作一般における靈感について「贈与」の言語を使って説明しているのだが、この論理を先の“America and I”からの引用に適応すれば、イージアスカは、自身の創作が、単なる自己の感情や思想の発露の結果であるのではなく、迫害と流浪の生活を強いられてきた先祖の花開くことのなかった思いを「贈与」された結果としてあるのだと考えていたのだと言えよう。さらにハイドは、アメリカ先住民による歓待の習慣を例に、贈与経済と交換経済の違いを次のように説明する。アメリカ先住民のとある習慣では、客人をタバコの回し飲みでもてなし、帰り際にパイプを土産として贈る。贈られた側は、自分のもとに客人が来た折には、彼の招客に対して自分が受けた歓待を繰り返す。そうすることによって、歓待の印であるパイプは人々の間を巡回する。このような贈与物の巡回、あるいは流れこそ贈与経済を交換経済と分け隔てる要点であるとハイドは述べる。

The opposite of “Indian giver” would be something like “white man keeper” (maybe “capitalist”), that is, a person whose instinct is to remove property from circulation, to put it in a warehouse or museum (or, more to the point for capitalism, to lay it aside to be used for production). [. . .] The only essential is this: *the gift must always move*. There are other forms of property that stand still, that mark a boundary or resist momentum, but the gift keeps going. (4; emphasis original)

ハイドによるアメリカ先住民の歓待習慣の例を見れば明らかなように、贈与経済においては「贈与物」が人々の間を行き交うことで、人々の間に繋がりが生じる。それは、ハイドも指摘するように、「モノ」の流れが資本家による富の蓄積へと向かう経済体制とは明確な対照をなす。交換経済では、「モノ」は行き交っても、それは各個人を資するために行われ、そのような「モノ」の流れは人の繋がりには結びつかない。ハイドは、普遍的な意味で贈与一般を論じているが、似たような考えは、東欧のシュテットルにおいても共有されていた。Natalie F. Joffe は、“The good things of the world are infinite and acquirable. They are those things which confer higher status and are acquired not for themselves alone but for transmission, and the flow is always from the strong to the weaker” (429) というように、ツェダカーの習慣においても富、つまり「贈与」が人から人へと流れていくことの重要性を指摘している。前節で確認した、共同体を機能させる役目をツェダカーが担っていたという事実を思い起こせば、ハイドによる “It is the cardinal difference between gift and commodity exchange that a gift establishes a feeling-bond between two people, while the sale of a commodity leaves no necessary connection” (72) という言葉の意味がより鮮

明になろう。贈与は巡回することによって、人々を繋ぎ、共同体を成立させる。イージアスカがアメリカとの関係を築くため、「贈与」にこだわった理由もここにある。「創作」とは、根本的に贈与的な行為であり、それを「商品」として扱うのではなく、「贈与」として扱うことによって、アメリカの読者、ひいてはアメリカ社会との関係を築こうとイージアスカは意図していたのだと考えられる。

4. ユダヤ文化と書く女

では、なぜイージアスカは、アメリカ社会と贈与的な関係を取り結ぶ必要があったのか。その背後には、受け入れ側の社会であるアメリカの一員になりたいという意識に加えて、「書く女」としてのイージアスカとユダヤ文化、ひいてはそれを象徴する彼女の父親との確執があったと推察される。正統派ユダヤ教のラビを父に持つイージアスカは、伝統的なユダヤ教のしきたりを娘たちに押し付ける父に反発し、10代の頃に家を飛び出す。その後は、慈善団体の助けを借りながら自活していた。そのような父と娘の間に生じた乗り越えがたい対立は、1925年発表の小説 *Bread Givers* で詳しく語られている。この親子の対立で最も問題となったのが、イージアスカの執筆活動への情熱である。伝統的ユダヤ文化では、「書く」という行為は男性の領域に属するものであり、女性が執筆活動を行うことは、そのような伝統への反逆行為であり、いわば自分よりも上位に存在する父や夫、さらにはユダヤ教そのものを比喩的に「殺す」行為に等しいものと考えられていた (Antler 18)。ユダヤ系の批評家 Irving Howe は、イージアスカの創作活動への情熱を評し、“No woman from the immigrant Jewish world had ever before spoken with such helpless candor about her fantasies and desires” (269) と述べている。そのような執筆への情熱に燃えるイージアスカにとって、自身の夢とユダヤ文化共同体の共存は不可能も同然であった。ゆえに、イージアスカはユダヤ文化共同体から離れ、新しい帰属の場所であるアメリカを渴望したのだと考えられる。

イージアスカの執筆への情熱は、彼女が伝統的ユダヤ文化における女性の務めの一つである子孫繁栄を全うすることへの障壁として大きく立ちはだかった。彼女の遺作となった伝記的小説 *Red Ribbon on a White Horse* では、伝統文化内において自身に課せられた責務を果たせないことを、アメリカ社会での成功で埋め合わせようとする試みの失敗が綴られる。以前に述べたように、イージアスカは自身について語る際、事実を改変する傾向が強く、そのような変更点の一つとして多用されるのが、結婚と出産という自身の伝記的事実の隠ぺいである。この小説においても、主人公の「イージアスカ」は、若い未婚の女性として登場する。「女の責務」である結婚をすることもなく、作家となる夢を追い続ける主人公は、彼女の友人であるせむしの魚売りと同様に、「異形」の存在としてユダヤ移民共同体のつまはじき者として相手にされない。彼女の姿を見て背を向ける若者たちに「イージアスカ」は “I hate young men! They say I have a *dybbuk*, a devil, a

book for a heart. They laugh because I want to be a writer” (103) と、怒りを露わにする。そのように共同体内で「人」として扱われない自らの境遇の慰めを執筆活動に見出す「イーリアスカ」は、自身の作品こそ自らの「子」とであると主張する：“My children were the people I wrote about. I gave my children, born of loneliness, as much of my life as my married sisters did in bringing their children into the world” (216)。そして、作家として大成した後には、“I felt I had justified myself in the book [*Bread Givers*] for having hardened my heart to go through life alone. I described how my sisters, who had married according to my father’s will, spent themselves childbearing in poverty” (216) と述べ、生物学的再生産よりも文学的生産を優先した自身の決断の「正しさ」を誇る。

しかしながら、どれだけ「新世界」における成功の蜜を味わおうとも、伝統に背いた人生を歩む娘に対する父の怒りは静まることがない。物語の終盤、印税の稼ぎを手に、長年に亘って別離していた父のもとを訪ねる「イーリアスカ」を待っていたのは、伝統的ユダヤ文化の枠組みから、反逆的娘の存在意義を全否定する父の叱責の言葉であった。

It says in the Torah: He who separates himself from people buries himself in death. A woman alone, not a wife and not a mother, has no existence. No joy on earth, no hope of heaven.

Look around you. Nothing in nature lives alone. The birds in the air, the fishes in the sea, even the worms under the stone need their own kind to fulfill themselves. (217)

以上のような、書くことを巡るユダヤ文化との確執を考慮すれば、なぜイーリアスカが強迫観念的にまで何度も「創作」を介してアメリカ社会に「贈与」をしたいと繰り返し述べていたのか、その理由が明らかになろう。自らの「創造性」をアメリカ社会に「贈与」することは、彼女の存在意義を左右する重要な行為であり、伝統的ユダヤ文化および、それを体現する父からの叱責を帳消しにするためにも、彼女の「贈与」を理解し迎え入れてくれる新たな帰属先を渴望していたゆえの行為であったと考えられる。

5. アメリカの「父」と偶像崇拜

イーリアスカにとって、デューイは、伝統的ユダヤ文化によって娘を抑圧する父権主義的父に代わる新たな「父親」として立ち現れる。Jo Ann Boydston は、イーリアスカがデューイとの関係を物語に仕立てる際、実際以上の年齢差を設定し、両者の「親子関係」を暗示するような描き方をしていると指摘する (xl)。確かに、実際には20歳ほどしか違わない二人の年の差は、*All I Could Never Be* においては30歳以上に変えられている。事実、この小説では、主人公の父とデューイ

的登場人物の間の類似性が言及されている。20代前半のユダヤ人女性 Fanya Ivanowna は、50代半ばの高名な社会学者 Henry Scott による講義をセツルメントハウスで聴講する。ホレス・カレンの「人類のオーケストラ」を連想させるような “[s]ymphony of nations” (38) を奏でる場としてのアメリカ像を語るスコットの姿に感銘を受けたファーニャは、スコットの研究室を訪ねる。聖書からの一節を交えて会話をする彼の姿に、東欧ですでに亡くなっている父親の面影をファーニャは重ねる。

The Biblical phrase reminded her of her father, whose conversation was always colored with words from the Bible. For an instant, Henry Scott had a strange resemblance to him. [. . .] Her father had lived and died in the ghetto of Poland. This man a Gentile — an American. And yet, for all their difference, there was that unworldly look about Henry Scott’s eyes that made her feel her father. Her father as he might have been in a new world. (35)

ただ単に、父とスコットが似ているという指摘をするだけではなく、後者が新世界における前者の代替人物として認識されている点は注目し得る。さらには、この出会いの時点で、ファーニャが孤児であるという設定も新世界の「父」としての「デューイ」を考察する上で重要である。イージアスカにとって、抑圧的な存在である旧世界の「父」の不在は、新世界の「父」との関係を容易なものとしてくれる。それを裏付けするかのごとく、ファーニャはスコットとの会話の中で、自身の父とスコットという対比に、旧世界と新世界という対比を重ねるかのごとく、「孤児としての移民」という考えを披露する：“*We foreigners are the orphans, the stepchildren of America. The old world is dead behind us, and the new world—about which we dreamed and about which you lectured to us—is not yet born*” (39; emphasis mine)。最初の短編作品集である *Hungry Hearts* においても、移民の理解者となるデューイ的人物が登場する。性別は異なるが、“*Soap and Water*” のミス・ヴァン・ネスや“*How I Found America*” に登場する高校教師 Miss Latham、そして東欧から単身移民してきたユダヤ女性を主人公とした“*The Miracle*” に登場する、この作品集の中で最もデューイ的人物と言えるアメリカ人男性教師を例として挙げられる。どの登場人物も移民の視点から新たなことを学ぶことに熱心であるが、*All I Could Never Be* のように、新世界の「父親」としての「理解者」というアイデアは *Hungry Hearts* の中には見受けられない。これまで見てきたように、新世界における「贈与者」としての「移民」というテーマが、イージアスカ自身の創作活動と、それに付随する旧世界の「父」との確執と密接に関わっているということを勘案すれば、デューイ的人物に「父性」が付与されたという事実は、イージアスカの創作におけるこのテーマの深まりを示していると言えよう。

“*The Miracle*” と *All I Could Never Be* はともに、イージアスカと思しき移民女性とアメリカ人男性教師の恋愛物語として描かれているというだけでなく、主役の二人が互いを補うような対

照的な性質を持ち、ゆえに互いを必要とするという筋書きが共通している。“The Miracle”の男性教師が主人公に向けて、“Though you work in a shop, you are really freer than I. You are not repressed as I am by the fear and shame of feeling. You could teach me more than I could teach you. You could teach me how to be natural” (59) と言うと、それに対し、“I’m burning to get calm and sensible like the born Americans. [. . .] How can I learn to keep myself down on earth like the born Americans?” (59) と移民女性は返答する。「冷静」で「理性的」アメリカ人男性と「感情的」な移民女性という組み合わせは、イージアスカが頻繁に使う常套句のようなものであり、イージアスカの友人であるユダヤ移民女性 Rose Pastor とアングロ・サクソンの億万長者 Graham Stokes の結婚を下敷きにして描いた小説 *Salome of the Tenements* (1923)⁸においても、ヒロイン Sonya Vrunsky を形容する言葉として “emotional” (1) が使われる一方で、彼女の思慕の相手であるアメリカ人 John Manning には、“cultured restraint” (1) や “cold logic” (3) などという語句が使用されている。*All I Could Never Be* も例に漏れず、主役の二人が、磁石の両極のように対照的な性質を持つゆえに惹かれあうという設定を踏襲している。ユダヤ移民街を二人で散策した折、ファーニャは、ユダヤ移民の生活を好意的に受け止めるスコットによって、それまでは貧しく教養も欠いた存在として恥じていた自身の出自を肯定的に受け止めるようになる (55)。それに対し、今度はスコットの方が、自身の出自への嫌悪を表明し、自分と正反対の性質を有するファーニャによる救済を求める。

You said that night that I gave you back the meaning of your race. Now it is I who ask you for understanding. I am an old-fashioned, Yankee puritan. I do not belong to myself [. . .] Too much wisdom makes fools of the wise. Perhaps your instinct may be surer than all my reasoning. (63-64)

しかしながら、このような相互補完的なユダヤ移民女性とアメリカ人男性というモチーフに関しても、この小説では以前の作品群以上の深まりが見て取れる。それは、実際にイージアスカとデューイの間で交換された詩が作品の中に組み入れられることによって実現されている。

本稿の最初の節でも触れたとおり、この高名な教育学者は、長年に亘り秘密裏に詩を書き続けていた。自然の美を謳ったものから、イージアスカとの恋愛関係に触発されて書いたものまで、実に90を超える詩作品を彼は作っていた。それらが今日公開されるようになったきっかけを作ったのが、コロンビア大学図書館職員 Milton Hasely Thomas であった。デューイのオフィスの屑籠に捨てられていた彼の詩を偶然見つけたトーマスは、爾来、ゴミとして捨てられ続けていたそれらの詩を本人に知られることなく収集し続けていた。1952年のデューイの死後にその詩の存在を知ったロベルタ夫人が、それらに対する法的所有権を主張したため、詩の一般公開は見送られた。1970年代によくデューイ基金がその所有権を譲り受けた後、1977年に *The Poems of*

John Dewey として一冊の本にまとめられた。その入手経路は定かではないが、イージアスカは、デューイによる二つの詩を多少の改変を加えた上で自身の作品の中に組み入れている。⁹

そのうちの一つ、“Generations of stifled worlds reaching out”という一節から始まる詩が、*All I Could Never Be* の中において、主人公二人の間の異民族間交流／贈与の印として使われている。まず、この詩の一部が、ファーニャからスコットに宛てて書かれた手紙の中に登場する。スコットの研究室を訪れた翌日、差出人の名を書かずに、ただ“Generations of stifled words—reaching out to you—aching for utterance—dying on my lips unuttered”（41）とだけ記した手紙を彼に送る。その手紙を受け取るや否や、差出人の正体に気づいたスコットは、ファーニャの一節を組み入れた新たな詩を作って彼女に送り返す。その詩の冒頭は以下のように始まる。

Generations of stifled words, reaching out *through you*
 Aching for utterance, dying on lips
 That have died of hunger,
 Hunger not to have, but to be. (43; emphasis original)

ファーニャによる“reaching out to you”という語句が、スコットによって“reaching out *through you*”に書き換えられている点は非常に重要である。なぜならそれは、ハイドが主張するところの贈与経済の必須条件——「贈与」は常に流れているべきである——を満たしているからである。ファーニャによる詩は、“to you”という語句により、移民の声なき声が「あなた」つまり「アメリカ」の方へと投げかけられるだけであり、その言葉が受け手に届くのかどうかは不明であることが暗示される。そこには、声は上げたいが、果たして受け手にきちんと聞き入れてもらえるかどうか分からないという、移民の不安が色濃く反映されていると言える。しかしながら、スコットによる詩は、“to”を“through”に置き換えるだけで、彼が代表するところのアメリカ社会が、ファーニャという異文化間の仲介者の助けを借りて、移民の声なき声の存在を認識していることを示唆する。

さらには、スコットにより書き換えられた詩の後半部は、移民の声なき声を受け入れ運命を共にしようとする「スコット＝アメリカ」の姿勢さえも暗示する。

And I, from afar shall see
 As one watching sees the star
 Rise in the waiting heavens,
 And from the distance my hand shall clasp yours,
 And an old world be content to go,
 Beholding the horizon

Tremulous with the generations of the dawn. (43)

引用部の後半四行における、「共に手を取り、古い世界が消えていき、夜明けの世代の振動を受けて震える水平線を見る」というくだりは、本稿第三節で紹介したイージアスカによる随筆や詩にみられる、いまだ完成の途上にある国アメリカの建設に貢献しようとする移民のイメージに、新たなイメージを付け加える働きをなしている。つまり、旧世界にとって代わって、夜明けの世代、言い換えればアメリカという国が浮上しようとする姿を、アメリカ人と移民が手を取り合って凝視するというイメージは、この小説以前に書かれたイージアスカの作品に描かれた、新しい国の建設に加わろうと孤軍奮闘する移民の姿を刷新するような、アメリカ建設という共通の目標に向かって協力するアメリカ人と移民の姿を髣髴とさせる。ここにおいても、この小説は以前のイージアスカ作品における「移民」と「アメリカ」の関係性に関する議論を一步前に進めている。

ハイドが言うように、「贈与」は人々の間を巡らなければならないのであれば、この小説における「移民＝ファーニャ」の言葉は、彼女と「アメリカ＝スコット」の間を循環している。彼女が発した詩の言葉は、スコットのもとに届くだけでなく、その意味を深化させて再び彼女のもとへと返っている。まさにこの意味において、この小説における「移民」と「アメリカ」の関係は、遡ること10年ほど前にイージアスカが望んだ「贈与的關係」として *All I Could Never Be* の中で結実したのだと言える。

では、この小説が異人種・異教徒間の幸福な融合で終わるのかというと、決してそのようなことはない。現実にイージアスカとデューイの関係が自然消滅してしまったように、ファーニャとスコットの蜜月もあっけなく幕を閉じることとなる。この二人の関係の幕引きを理解する上で重要なのが、「偶像」としての「デューイ」というモチーフである。物語の冒頭から、「デューイ＝スコット」は、ユダヤ教の教えに代わる新たな「知」をユダヤ移民に分け与える存在として描かれている。スコットによる講義で始まる第一章は、次のような一節で幕を開ける。

Crowded into the settlement house auditorium was a conglomerate gathering of many nationalities. Thoughtful faces, young, eager faces, grey, worn, wrinkled faces that were as eager. Clean-shaven clerks, pushcart-peddlers, tailors, gaunt factory girls — all sublimating their thwarted social life in intellectual interests. Misfits in the social scheme trying to find where they belonged, following every free lecture on music, painting, poetry, philosophy, or sociology with the same indiscriminate ardor with which their elders followed the exhortations of their *rabbis*. People in their ignorance worshipping the god of knowledge. (27)

世代を超えて、労働の日々では得られない崇高な何かを得ようとセトルメントに集まる移民街の面々の様子が活写されるこの場面で重要なのは、人文教養という世俗の「知」が、前世代まで――

つまりは東欧に暮らしていた世代まで——尊ばれていたラビによる宗教的「知」にとって代わったという指摘である。この移民たちにとって、スコットは、新世界で必要とされる新たな「偶像」なのだ。そのことは、ファーニャによるスコットへの視線の描写でも確認される。

[...] Fanya's fanatic idealism made him the symbol of all she could never be. He was free of their sordid bondage for bread. He was culture, leisure, the freedom and glamor of the "Higher Life" (28)

ユダヤ教社会において、ラビは宗教的学問に専念すべく、世俗の事柄に煩わされることがないよう、共同体構成員によるお布施によってその生活が支えられる習慣があることを想起すれば、上記の引用におけるスコットとユダヤ教の宗教的指導者の類似性が見えてくる。ともに、日常の些事からは解放され、「高次の」事柄のみに専念する存在と目されている。ファーニャの父がラビであり、彼が旧世界で亡くなっていることを鑑みれば、スコットとラビの近似性は当然のことと言える。スコットは、新世界における「父」であると同時に、父祖の宗教にとって代わる新たな「宗教」の指導者であり、それを象徴する「偶像」でもあるのだ。

移民女性とアメリカ人学者の関係の終焉は、新世界の「偶像」であるはずのスコットが、「人間」であるということにファーニャが気づいてしまったことから始まる。気持ちの高ぶったスコットによる突然の抱擁と接吻に驚いたファーニャは、今まで自分が彼に抱いていた幻想が崩壊し、彼との溝が開いていくのを感じる。

Dark barriers rose inside her. They welled up in her heart — the sorrow — the disillusion! ... Instead of a god, here was a man—too close, too earthly. She wanted from him vision—revelation—not this—not this. (101)

かくして物語は、「自分になり得なかったもの」の象徴として「スコット＝アメリカ」という「偶像」を追い求めたファーニャの反省と後悔の念で幕を閉じる。スコットとの関係は、輝かしいアメリカの明日を創るための同盟関係ではなく、自らのルーツを否定し、「誤った」神を崇拝しようとした失敗の記憶として刻まれる：“She sought escape from what she was. Therein lay her weakness. Deserting the people back of her. Abandoning the God of her fathers. Setting him [Scott] as her new god. Dreaming love that never was!” (203)。紀元前二世紀にまで遡る、異教徒により穢されたエルサレムの神殿の奪還を祝う「光の祭り」の灯りを目にしたファーニャは、スコットと出会う前の自分に戻るべく、再び移民街に戻る決意をして小説本編は終わる。いわば、主人公による新世界への帰属の可能性が頓挫した形でその幕が引かれることになるのだ。

6. おわりに

これまで見てきたように、*All I Could Never Be* は、様々な点において、イージアスカが描き、訴え続けてきた「移民」と「アメリカ」との「贈与的關係」というテーマを深化させているという点で、彼女の著作群の中でも決して低くない評価に値する作品だと言える。「贈与」と「創作」が、女性であり、ユダヤ人であり、且つ作家でもあるイージアスカにとって、非常に意義深いモチーフであることを考慮に入れば、なおさらその重要度は増すものだろう。しかしながら、前節で確認したファーニャとスコットとの関係消滅の描写は、それまで築き上げてきた重要テーマの意味を無効にしている。自身の人生の活力源であるところの「創作」を否定するユダヤ文化に異議申し立てをするために企図した「アメリカ」との贈与關係は、結局のところ「誤った」道として否定され、その抑圧性を憎んだはずの父祖の文化へと戻ってしまっている。このような矛盾した結末は、ひとつには、この小説が発表された1930年代には、「移民作家」イージアスカの人气が陰り、彼女自身、移民の声を伝えることでアメリカ社会に参画するという長年の夢を信じきれなくなった可能性が指摘できるだろう。この後、1950年の *Red Ribbon on a White Horse* の出版まで、何十年にも亘る沈黙の期間が続くことを考えれば、決して的外れな推測ともいえないであろう。この小説の結末で、父祖の文化、自らのルーツへ戻る決意をファーニャはするのだが、そこには、果たして「孤児」であるファーニャに戻る場所は本当にあるのだろうか、という皮肉が見て取れるのも事実である。そのように考えると、一見矛盾し、破たんした結末を迎えるこの小説に、「新世界」にも「旧世界」にも属することを許されない、「移民女性作家」イージアスカの悲痛な叫びを聞き取ることは決して難しいことではない。

注

- ¹ 近年の研究では、イージアスカは、作品や新聞メディアへの露出により、「無学な移民作家」というペルソナを意図的に築き上げていたという指摘もされている。詳しくは、Dearborn, "Anzia Yezierska and the Making of an Ethnic American Self" を参照。
- ² この点に関し、イージアスカ自身も "Mostly about Myself" の中で、"When I started to write, I could only write one thing—different phases of the one thing only—bread hunger" (136) と述べている。
- ³ イージアスカとデューイの伝記的事実に関しては、Henriksen, pp.83-107、および Dearborn, *Love in the Promised Land*, pp. 107-39 を参照。
- ⁴ デューイの男性が登場するのは、短編小説集 *Hungry Hearts* では "Wings" や "The Miracle" の二作、もう一つの短編集 *Children of Loneliness* (1923) では、"To the Stars" の一作、そして、小説では、*Salome of the Tenements* (1923)、*All I Never Could Be* (1932)、および、*Red Ribbon on a White Horse* (1950) の三作が挙げられる。
- ⁵ Clara de Hirsch Home は、親元を離れて都市部で働く若い独身女性の寄宿所として運営されていた。ドイツ系ユダヤ人によって運営されていたこの施設は、主に、東欧系ユダヤ移民のアメリカ化を目的に、様々な職業訓練の

教室も設けていた。この施設と移民のアメリカ化教育との関係については、Klapper および Sinkoff を参照。

- ⁶ 主に19世紀末から20世紀初頭にかけて、ドイツ系ユダヤ人を中心として、東欧系ユダヤ移民を支援する目的で、多くの慈善団体や学校が設立された。その背後には、強い宗教性と旧世界の生活習慣、そして貧困により、アメリカ社会からは「異質な」存在として嫌厭されていた東欧系ユダヤ移民をアメリカ化しようとするドイツ系ユダヤ人の意図があった。さらには、「異質な」文化・社会背景を持つ東欧系ユダヤ移民が大挙してやって来ることを契機に、ヨーロッパ同様、アメリカの地においても反ユダヤ主義が燃え上がるのではという危機意識をドイツ系ユダヤ人が抱いたゆえ、当時、東欧系ユダヤ移民のアメリカ化運動が熱心に行われたのだと多くの研究者は指摘している。この時代の東欧系ユダヤ移民とドイツ系ユダヤ人の関係については、Berrol および Sorin を参照。
- ⁷ イーリアスカの作品における「ツェダカー」の表象に関しては、拙論“*Tzedakah in Hester Street*”を参照。
- ⁸ Rose Pastor と Graham Stokes の伝記的事実に関しては、Shapiro and Sterling を参照。
- ⁹ “Generations of stifled worlds reaching out” (Boydston 4-5) は、*All I Could Never Be* にて、“I wake from the long, long night” (Boydston 5-6) は、*Red Ribbon on a White Horse*, pp. 111-12 にてそれぞれ言及されている。“I wake from the long, long night”に関しては、大幅な言葉の改変、省略が行われている。

引用文献

- Antler, Joyce. *The Journey Home: Jewish Women and the American Century*. New York: Free, 1997. Print.
- Berrol, Selma. “When Uptown Met Downtown: Julia Richman’s Work in the Jewish Community of New York, 1880-1912.” *American Jewish History* 70.1 (1980): 35-51. Print.
- Boydston, Jo Ann, ed. *The Poems of John Dewey*. Carbondale: Southern Illinois U P, 1977. Print.
- Dearborn, Mary V. “Anzia Yezierska and the Making of an Ethnic American Self.” *The Invention of Ethnicity*. Ed. Werner Sollors. New York: Oxford U P, 1989. 105-123. Print.
- . *Love in the Promised Land: The Story of Anzia Yezierska and John Dewey*. New York: The Free Press, 1988. Print.
- Heinze, Andrew R. *Adapting to Abundance: Jewish Immigrants, Mass Consumption, and the Search for American Identity*. New York: Columbia U P, 1990. Print.
- Henriksen, Louise Levitas. *Anzia Yezierska: A Writer’s Life*. New Brunswick: Rutgers U P, 1988. Print.
- Honda, Atsuko. “*Tzedakah* in Hester Street: Charity and Generational Conflict in *Bread Givers*.” *Tagen Bunka* 10 (2010): 1-20. Print.
- Howe, Irving. *World of Our Fathers: The Journey of the East European Jews to America and the Life They Found and Made There*. 1976. London: Phoenix, 2000. Print.
- Hyde, Lewis. *The Gift: Creativity and the Artist in the Modern World*. 2nd ed. New York: Vintage, 2007. Print.
- Joffe, Natalie F. “Non-Reciprocity among East European Jews.” *The Studies of Culture at a Distance: The Study of Contemporary Western Cultures*. Vol. 1. 1953. Eds. Margaret Mead and Rhoda Métraux. New York: Berghahn, 2000. 428-32. Print.
- Klapper, Melissa. “Jewish Women and Vocational Education in New York City, 1885-1925.” *American Jewish Archives Journal* 53.1-2 (2001): 113-146. Print.
- Mauss, Marcel. *The Gift: The Form and Reason for Exchange in Archaic Societies*. Trans. W.D. Halls. London: Routledge, 1990. Print.
- Neusner, Jacob. *Tzedakah: Can Jewish Philanthropy Buy Jewish Survival?* New York: URJ, 1997. Print.

- Posner, Raphael. "Charity." *Encyclopaedia Judaica*. Eds. Fred Skolnik and Michael Berenbaum. 2nd ed. Vol. 4. Detroit: Macmillan Ref. U.S.A., 2007. 569-575. *Gale Virtual Reference Library*. Web. 8 Mar. 2011.
- Shapiro, Herbert and David L. Sterling, eds. *I Belong to the Working Class: The Unfinished Autobiography of Rose Pastor Stokes*. Athens: U of Georgia P, 1992. Print.
- Sinkoff, Nancy B. "Education for 'Proper' Jewish Womanhood: A Case Study in Domesticity and Vocational Training, 1897-1926." *American Jewish History* 77.4 (1988): 572-599. Print.
- Sorin, Gerald. "Mutual Contempt, Mutual Benefit: The Strained Encounter between German and Eastern European Jews in America, 1880-1920." *American Jewish History* 81.1 (1993): 34-59. Print.
- Stubbs, Katherine. "Introduction." *Arrogant Beggar*. By Anzia Yezierska. Durham: Duke U P, 1996. vii-xxxiv. Print.
- Yezierska, Anzia. *All I Could Never Be*. New York: Brewer, 1932. Print.
- . "America and I." *How I Found America* 144-53. Print.
- . *Arrogant Beggar*. 1927. Durham: Duke U P, 1996. Print
- . *Bread Givers*. 1925. New York: Persea, 2003. Print.
- . "Children of Loneliness." *How I Found America* 178-90. Print.
- . "The Deported." *The Nation*. 24 July 1920. *The Nation*. Web. 18 Feb. 2009.
- . "How I Found America." *How I Found America* 108-27. Print.
- . *How I Found America: Collected Stories of Anzia Yezierska*. New York: Persea, 1991. Print.
- . "The Miracle." *How I Found America* 50-61. Print.
- . "Mostly about Myself." *How I Found America* 131-43. Print.
- . *Salome of the Tenements*. 1923. Urbana: U of Illinois P, 1995. Print.
- . "Soap and Water." *How I Found America* 71-77. Print.
- . *Red Ribbon on a White Horse*. 1950. New York: Persea, 1987. Print.
- . "To the Stars." *How I Found America* 162-77. Print.
- . "Wings." *How I Found America* 3-16. Print.